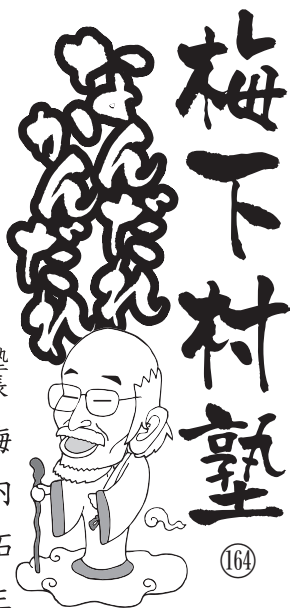


「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～

(恩讐の彼方に)
ロシアによるウクライナ統治への行動と飛行機墜落の惨事、シリアの内戦と難民、パレスチナとイスラエルの戦争、中国による一方的東アジアの海洋進出、世界には戦争やテロが絶えない。

1919年に小説家・菊池寛は江戸後期に、豊後国(大分県)の山国川沿いの交通の難所に、青の洞門を開削した実在の僧・禅海の行動を「恩讐の彼方に」という小説に書いた。政治と宗教が絡まった争いは根が深く、悲惨な結果につながることは歴史で明らかであるが、これ乗り越えるのは並大抵の努力



塾長 梅内 拓生

ではできないが、それぞれの民族は歴史の知恵としてその解決方法を持っており、長い歴史文化をもつ日本、そして気仙がその気になれば、「恩讐の彼方に」、この仲介役はたす可能性を持っている。

7月17日の第1面の「世迷言」は気仙のこの(恩讐の彼方に)を述べている。



カモメ飛ぶ 海と空と

(写真を詠む)
7月17日の第8面の定点観測(164) 気仙の記録「未来へ向かう道しがらくは「閉ざされた国道」と「開かれた国道」を掲載している。平成23年3月12日撮影と平成26年7月15日撮影の写真であり、あの大惨事と困難を乗り越えた感慨が強く伝わってくる。

大津波 いくどのみこ
む 村と街 拓生

さみだれや 大河を前に 家二軒 蕪村

の すらなれるり

春の海 終日(ひねもす)のたり のたり哉

拓生 蕪村

7月17日の第5面の「ビシッと体育座り」わんぱく広場 明和保育園、最前列の子どもの真剣なまなざしと、後列の子どもの少しリラックした表情が面白い。地域を支え守り、地域を出て世の中を支え守る大きな魂が感じられる。

写真は姿を映し、心を育てるものと思えば、写真を詠む楽しみが湧いてくる。

